

世界の蘭と熱帯の花フェスタの開催について

濱谷修一・島田有紀子・堀川大輔・磯部 実

平成 31 (2019) 年 2 月 23 日から 3 月 3 日にかけて、「世界の蘭と熱帯の花フェスタ」を開催したので、その概要について報告する。

広島市植物公園では、昭和 62 (1987) 年 3 月に「世界蘭会議広島大会」を開催し、それを記念して毎年本園大温室を主会場として大規模なランの展示会を行ってきた。ところで、平成 28 (2016) 年 2 月から大温室が再整備(リニューアル)工事のために閉鎖されたために当該のイベントは行われなかったが、平成 30 (2018) 年 3 月に再オープンしたことを受けて相当するイベントを再開したものである。なお、平成 30 年度は 7 月から 12 月にかけて大温室に隣接する熱帯スイレン温室の明装工事が行われ、温室内の植栽展示も入れ替えが行われたことから、熱帯スイレン温室の新装お披露目も兼ねることとなった。

展示テーマ

本イベントのテーマは「バオーンと世界をめぐる」とした。「バオーン」とは、大温室リニューアルを機に、オーストラリア、西オーストラリア州北部のカナナラから導入した日本最大のオーストラリアバオバブ (*Adansonia gregorii*) の愛称である。愛称は、公募された中から選ばれた。このバオバブをモデルに、植物友の会会員の藤井かおり氏がキャラクターを制作し (図 1)、バオーンと一緒に世界の蘭と熱帯の花を見てまわるという設定で大温室を装飾した。

装飾について

大温室内については、バオーンのふるさとであるオーストラリアをスタートとし、その後、世界の主なランを原産地ごとに見てまわるという構成とした。

① 温室入口のエリア

大温室入口ロビーは周辺がガラス張りです採光が良く、来場者に気持ちを高揚してもらう効果も期待して、後述の洋ラン品評会の入賞花を展示した (図 2)。また、華やかさをより高めるた

めに、ケイフラワースタジオの講師の方に、ランの切花を使った盛花を制作・展示していただいた (図 3)。

② オンシディウムで彩るアカシアのトンネル

約 170 株のオンシディウム・オブリザツム、約 120 株のオ・アロハイワナガを使い、オーストラリアを代表するアカシアのトンネルを表現した (図 4)。

③ 壁画：オーストラリア浪漫飛行

デンファレ (約 1800 輪)、モカラ (約 500 輪) を一輪ずつ使い、広いオーストラリア大陸を移動する飛行機を描いた (図 5)。

④ ランで描いたオーストラリア大陸

ミニカトレヤ (約 100 株)、デンドロビウム (約 100 株)、シンビディウム (約 30 株)、モカラ (約 1200 輪) などを用い、オーストラリア大陸やオーストラリアの風物を表現した (図 6)。

⑤ オセアニアのランと植物

オセアニア原産の地生ランやデンドロビウムなど約 30 種類のラン、フトモモ科、ヤマモガシ科などを展示した (図 7)。

⑥ 東南アジアのラン

常設のアジア原産のランのコーナーの装飾を充実させ、シンビディウム、ファレノプシス、パフィオペディルム等を約 150 株展示した (図 8)。

⑦ 中南米のラン

常設の中南米原産のランのコーナーの装飾を充実させ、カトレヤ、オンシディウム、リカステ等を約 100 株展示した (図 9)。

⑧ アフリカのラン

アングレカム、ジュメレア、バルボフィルム、ユーロフィア、ガストロキルス等、約 30 株のアフリカ原産のランを展示した (図 10)。

⑨ 愛好団体等による展示

広島県、山口県のランの愛好団体 (6 団体 : 52 名、335 点)、生産者 (広島県花卉園芸農業協同組合洋ラン部会 : 約 70 点) による展示・装飾のコーナーを設けた (図 11、12)。大温室のリニューアルに伴い、植栽されている植物がまだ十分に茂っていないために強い光が当たってしまう場所が所々できたため、一部の展示棚の上には日除けを設置した (図 13)。

愛好団体から出品されたランを対象に審査会 (洋ラン品評会) を行い、グランプリ 1 点、準グ

ランプリ2点を含む13作品を表彰した。これらの受賞作品は、前述した通り大温室の入口ロビーに展示した(図2)。なお、入口ロビーは展示効果は高かったが、エアコンが設置されてはいるものの構造的に温度・湿度を維持するのが難しく、高温多湿を要求する一部のランを展示することに不安がぬぐえなかった。次年度の受賞花の展示は入口ロビーとは違う場所で行うこととしたい。

⑩ 記念撮影コーナー

約200株のランに囲まれた、華やかな記念撮影コーナーを設けた(図14)。

⑪ 通路など

これまでに述べたテーマを持たせた装飾のほか、温室内の通路なども適宜ランで装飾を行った。この度の大温室の再整備では、温室内の低い位置から高い位置へ上るスロープ(空中回廊)を新設したが、その手すりなどにもランを装飾し、温室全体の華やかさを高めた(図15)

⑫ 熱帯スイレン温室

大温室内に多くの熱帯の花を展示したが、それに加えて、再オープンした「熱帯スイレン温室」においては熱帯性スイレンの植栽のほか、池の周辺植栽にアナナス類、アンズリウム、ドラセナなどを多く導入、展示した。

⑬ フクシア温室、展示温室

フクシア温室奥の野生ランコーナーでは、園保有の野生ランを展示し、展示温室では愛好家団体によるランの販売会を行った。

⑭ 関連行事

期間中毎日、洋ランクリニック(愛好家団体会員によるラン栽培に関する質問の受付)を行った。また、日にちを限定し、職員による洋ラン実演会(栽培の実演講習;図16)、植物友の会会員によるコサージュ作り教室(図17)、業者によるタイカービングの実演販売(図18)等を行った。

所感

大温室の再整備に伴い、大温室を使った大規模なラン展は4年ぶりの開催となった。久々の開催であったことから担当職員としては大きな盛り上がりとなることを期待したが、現実には厳しい結果となった。

まず、品目・流通量、価格などランを取り巻く状況が4年の間に大きく変わっており、展示

に使うランを確保するのが大変だった。

また、ランに対する市民の興味の低下、広報手法の失敗、マスコミによる効果的な告知がほとんど行われなかったなどいくつか理由が考えられるが、4年ぶりの開催にも関わらず期待した来園者数の伸びは得られなかった。

展示については、この度の大温室のリニューアルに伴い温室内のイベントのために大掛かりに装飾することができる場所が少なくなってしまい、以前から在籍する職員がイメージするボリューム感を出すことがそもそも難しかった。

加えて、この4年間、全園規模で行う大きな展示会が無かったため、このイベントは約半数の職員にとって初めて経験する大きな展示会であった。以前から在籍する職員の持つイメージが初体験の職員にうまく伝わらず、残念ながら思ったような仕上がりにならなかった部分があった。

一方で、実施しなかった間に、高齢化のため以前と比べて出品者・出品作品数が少なくなった愛好会もあったが、遠距離からの出品作品運搬にも関わらず、総じて積極的に展示に協力してくださる姿勢があり、本園でラン展を行い続けることの意義が認められた。

展示を行うにあたっての課題を解決するためには、大温室内の植栽を傷めないような新たな展示装飾手法の開発、これまでに使っていなかった園内エリアの有効活用を考えていかないといけない。

将来的にはイベントについて大きな見直しを行うことが必要となるかもしれないが、まずは平成31年の結果を反省し、次につなげていくこととしたい。

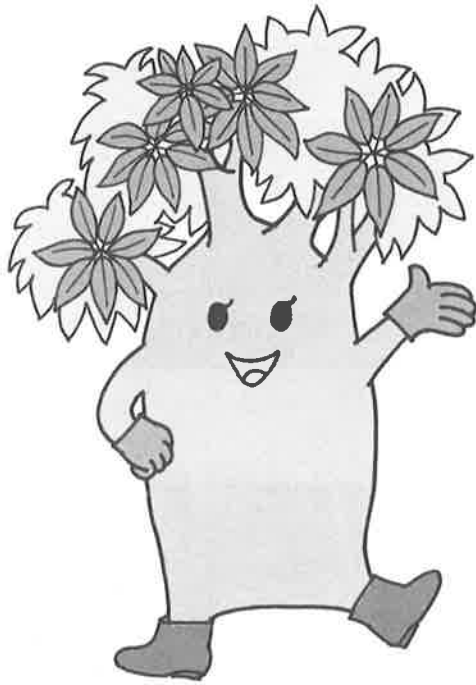


図1 バオンのキャラクター

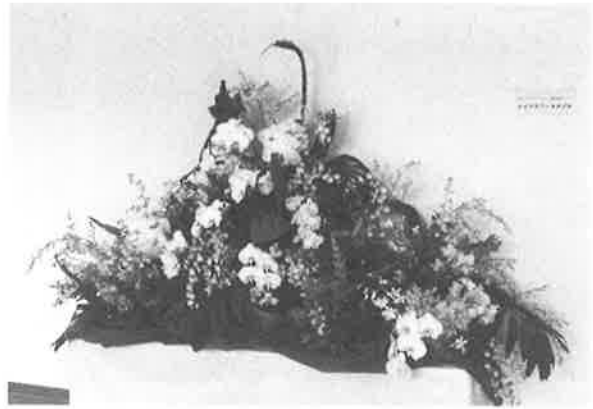


図3 ランを使ったフラワーデザイン



図2- 1, 2 洋ラン品評会受賞作品の展示

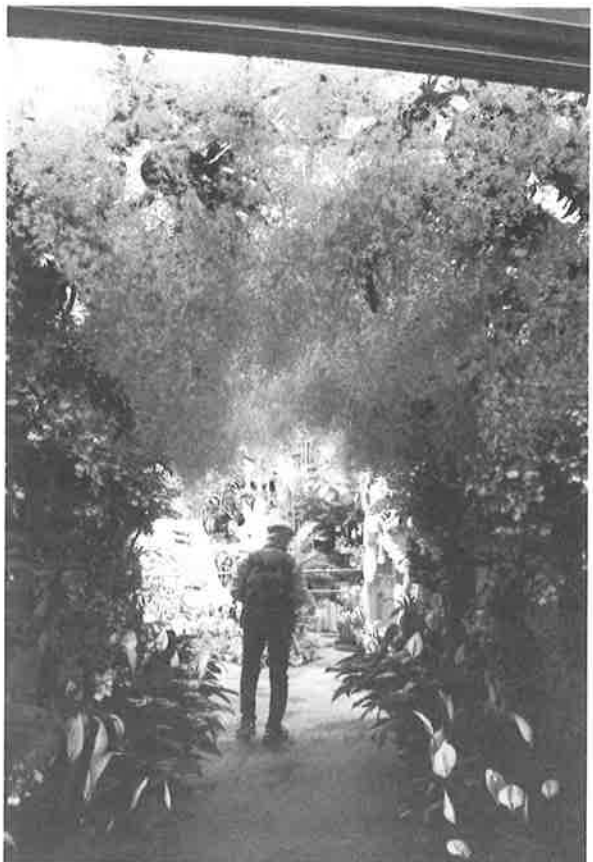


図4 オンシディウムで彩ったトンネル

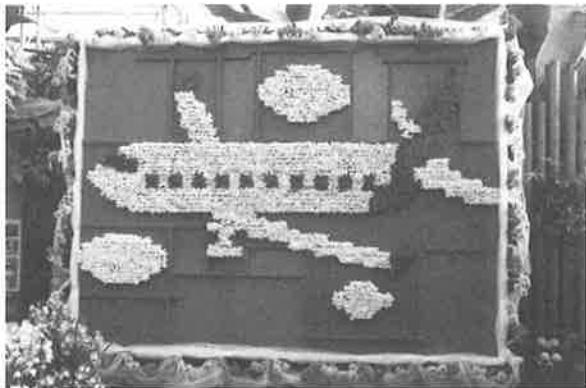


図5 デンファレなどで描いた飛行機



図9 中南米のラン



図6 オーストラリア大陸



図10 アフリカのラン



図7 オセアニアのランと植物



図11- 1, 2 愛好団体による展示



図8 東南アジアのラン



図 12 生産者による展示



図 16 洋ラン実演会



図 13 日除けを設置した展示棚



図 17 コサージュ作り教室



図 14 記念撮影コーナー



図 18 タイカーピングの実演販売



図 15 スロープ手すりの飾り